

---

## 竹久夢二とどんたく社同人による「雛によする展覧会」

王 文萱

---

### はじめに

竹久夢二(1884－1934)は大正浪漫を代表する画家で、絵画では挿絵や日本画、洋画、グラフィックデザインなど、文学では詩歌や童謡、童話など、多様な分野に及んで創作している。昭和時代に入ると、夢二は人形製作に執心していたが、そのことはあまり知られていない。実は夢二と彼の率いる人形製作グループ「どんたく社」が開いた「雛によする展覧会」は、日本の創作人形に大きい影響を与えたと考えられる。田中圭子の「日本における球体関節人形の系譜」によると、人形が芸術作品として認識されるようになったのは昭和に入ってからのことで、また、昭和初期における夢二の人形製作は、工芸とは異なる展開をしていく創作人形の萌芽であったという<sup>1</sup>。

「雛によする展覧会」に言及する文章は少なくないが、これらの文章は人形史の流れを論じるとき、どんたく社同人が展覧会を開いたことに触れるだけで、どんたく社同人が実際どのような製作方法で人形を作ったか、当時一般的だった人形とは何か異なるか、といった問題にはあまり論及していない。つまり、「雛によする展覧会」はどのようにして日本の創作人形にそれほど大きな影響を与えたと考えられるか、という問題は、まだ明らかにされていない。

本発表では、まず夢二とどんたく社同人たちは、どのような方法で人形を製作したか、を考察する。次はどんたく社同人の人形と、当時の人形作家たちとの作品を比較する。最後は、当時の雑誌記事などの検討を中心として、アマチュア作家たちによる「雛によする展覧会」が成功した原因について述べる。こうして、夢二とどんたく社同人との人形が現代の創作人形に与えた影響をはっきりさせることができると考える。

### 1、どんたく社同人の製作活動

昭和五年(1930)に、夢二を中心として「どんたく社」という人形製作グループが結成された。どんたく社の同人であり、後に無形文化財保持者すなわち人間国宝とよばれる堀柳女は「夢二さんの思ひ出」<sup>2</sup>という文章で、当時夢二がどんたく社を結成した経緯について

詳しく述べている。昭和五年、堀柳女が夢二に自分が作った人形を見せると、夢二は非常に喜び、人形製作のグループを始めようと堀柳女に薦めた。これは「どんたく社同人」の誕生とも言える。

堀柳女の記述によると、彼女がもともと作った人形は「しんこ細工」という小麦粉、もち米粉などを材料とする人形であったが、本格的な製作をはじめてみると、ある程度、技術が必要になるため、新聞紙を水につけて摺鉢ですりつぶす「どんたく人形」の作り方になった。

どんたく社同人のもう一人、岡山さだみ（当時、佐倉）の記述によると、どんたく社同人は最初に布で縫いぐるみのような人形を作ったが、飽き足らなくなってしまい、泥でも作ってみたが、思うようにならなかった。試行錯誤を重ねた結果、古新聞紙による「どんたく人形」の製作方法に達した。この作り方によって、何でも自由に作れるようになったと岡山さだみが述べている。

夢二の次男・竹久不二彦の論述によると、この製作方法は築地小劇場でギニョール作り（操り指人形）を手がけてきた足立文男が伝授したという<sup>3</sup>。その古新聞紙によって作った粘土は、「新聞粘土」とも呼ばれ、五十年代のはじめまで、特に人形劇でよく使われた<sup>4</sup>。

また、どんたく同人は従来の人形作家と異なり、金襴緞子や縮緬などを使わず日常生活における様々な布を自由に使って人形の服装を作っている。もっとも重要なのは、彼らは人形の感情を表現することに工夫している。堀柳女はこのような創作意識を記している。

例へば、遊女を製作する場合、遊女の着物や簪や姿の美しさを表現する以上に、その侘しさや哀しい心情を強く現す様努力します。<sup>5</sup>

夢二の絵画作品は、抒情性に富んでいるとよく評価されている。彼を中心とするどんたく社同人の作品も、人形を通して夢二の美意識を表現していることは言うまでもない。これらの人形作品が表現しているのは、当時の他の人形作品には見られない抒情性である。人形問屋吉徳十代・人形研究家の山田徳兵衛さえ、「不思議な人形」と評価していることから、「どんたく人形」と同時代の人形作品とは非常に異なっていることが考えられる。

同年、夢二が「どんたく人形の作り方」<sup>6</sup>という説明文と絵と新聞の切り抜きによって構成している絹本着色の作品を作り、どんたく人形の独特な製作プロセスを示している。この作品は、古新聞紙による製作方法を説明しているため、どんたく社同人が人形の作り方を模索し、古新聞紙で作る方法ができた後、描いた作品だと推測できる。

以下は「どんたく人形の作り方」の全文である。

どんたく人形の作り方

まづ水に浸した、古新聞(図)を、よく、すり鉢(図)で摺ります。つぎに糊をまぜて、程よく煮ます。

釘と糸をまいたAの棒へ、それをねりつけます。

顔のきめを細かくするためには奉書をちぎってはりつけて下さい(B図参照)顔が形を決定する。

顔の仕上げは羊皮も大まかでおもしろい。

これは糸屑です。

顔は好きなやうにお描きになられませう。

それから針金で形です。

秘伝

顔を小さく、手足を大きく作る事。

さかしらな写実は人形を殺す。

針金のままでさえ彼女は充分生き生きする。

アクセントを強く。

お好みの衣装。

そこで彼女はこすちゅ一むを要求する。

感情を表現する。

それから、ああ彼女は動き出したいと申します。

この作品が示している人形製作のプロセスは、堀柳女と岡山さだみが述べているのと同じである。また、「秘伝」のところによると、夢二が人形を製作するとき、もっとも重視するのは、「感情を表現する」ことだということが窺われる。

## 2、どんたく人形と当時の人形との違い

では、「どんたく人形」と当時の人形とは何が異なっているのか。どんたく社の同人たちは、人形製作についてはアマチュア作家であったが、作品が展覧会まで出品でき、当時ほかの人形作家に刺激を与えた。ここでは、どんたく人形の特殊性を明らかにするため、どんたく人形と当時職人の人形製作活動と、アマチュア作家による人形製作と比較する。

当時の伝統的な人形製作では、頭師・着付師といった専門の職人がそれぞれの部位を製作し、出来あがったものを問屋がまとめて商品化するという方式でやっていた。そのため、作家意識も生まれにくく、人形を通して自己を表現したいという考えもあまりなかった。

山田徳兵衛の『日本の人形史』<sup>7</sup>によると、日本初の人形作家と称される久保佐四郎は、すべてのパーツを一人で製作し、分業体制が確立した人形業界で、初めて落款を入れて販売したという。昭和三年に、久保佐四郎や平田郷陽らが「白澤会」という創作人形の研究団体を結成し、従来の人形にはなかった創作人形を目指し研究していた。「白澤会」の創作人形とは、確かに人形を通して感情を表現し、昭和の人形芸術運動にも影響を与えたが、「白澤会」成員の人形作家たちは伝統を受け継ぐ職人の家の出身であり、一定の技法によって人形を製作している。技法にこだわる人形作家たちの作品と、どんたく社同人の手作り感溢れる作品と異なる表現をしていることは言うまでもない。

次は当時のアマチュア作家による人形製作である。当時の婦人雑誌や少女雑誌などには、時々手芸品製作といったコラムで、人形の作り方が載っていた。これらのコラムによって、当時のアマチュア作家がどのように人形を製作したのか、が窺われる。ここでは、長く主婦向けの代表的な雑誌であった『主婦の友』を例として考察する。昭和年間、『主婦の友』が初めて人形の作り方を載せたのは昭和三年九月の「新案アメリカ人形の作り方」で、それはどんたく社同人が活動する前のことである。最初のところには以下のように紹介されている。

作り方の如何にも簡単で気の利いてゐるのが、すつかり気に入りまして、まだ日本では見られないのを幸に、作り方を皆様にご紹介いたしました。<sup>8</sup>

材料は布と綿、日本紙、染料などで、雑誌の付録にある型紙に沿って裁って縫って完成する。出来たのは構造が簡単な平面の人形であるが、紹介文からも見られるように、このような人形は当時の主婦たちにとっては珍しいものだとは推測できる。

人形作りの二回目は昭和四年の三月の「新聞紙で出来た可愛いお鏡雛」である。それは鏡餅を組み合わせて新聞紙で仕上げるもので、新聞紙の使い方はどんたく人形に似ているが、完成品は日本伝統的な飾り用の雛人形である<sup>9</sup>。三回目は、「雛によする展覧会」と同じ時点の昭和五年二月の「新案小布細工お人形さんの作り方」と「簡単に出来るロシア人形の作り方」<sup>10</sup>である。これら人形は布と綿で構成し、ちゃんとした手足と体を持ち、洋服を着ているが、人形によって感情を表現しようというような説明も入っていない。人形で感情を表現する意識が見られないのである。

以上から見ると、どんたく社同人は職人のような技術を持っていないが、自分で模索した作り方で、従来の職人による人形工芸とは異なる展開をしていくことが考えられる。また、芸術家である夢二の指導下で、どんたく社同人たちは、一般のアマチュア作家と異なる意味で、抒情性の富んだ人形作品を作っている。どんたく社同人の人形は、従来職人が

作った飾り人形でも、一般的なアマチュア作家が作った愛玩用の人形でもない。彼らは人形自身の感情を工夫して表現し、芸術作品としてそれらの人形を作ったのである。

### 3、雛によする展覧会

どんたく社は結成した同年の二月二十一日から二十三日まで、銀座の資生堂ギャラリーで、「ゆめ・たけひさ作 どんたく社同人製」の「雛によする展覧会」を開催した。この展覧会は高い評価を受け、すべての人形作品を売りつくした。当時の作品が殆ど残されていないため、ここでは当時の資料や記事、回想などによって、「雛によする展覧会」の様子を窺う。夢二は展覧会の案内状で以下のように語っている。

「雛に寄する展覧会」ではあるが、幾年かの中に心構えが変わってきて御覧に入れる如きものになつたのです。雛から人形へ、人造人間へ。遂にまた人形の欲するある生きものへ、これからどう変つてゆくかこの不思議なものは私共の製作慾をどこまで引いてゆくかはかり知れない。(後略)

案内状からわかるのは、夢二が最初に作りたかったのは雛人形であったが、「人形」というものの存在が彼の心の中で、ある「生きもの」に変わってきたということである。彼が表現したいのは、飾り用や愛玩用のものではなく、人形という「生きもの」の世界である。美術評論家・森口多里は文芸雑誌『若草』に、「雛によする展覧会」についての評論を、文章に残している。

(前略) 竹久君が、こんど突然——僕等にはほんとに突然だつた、——自分の画境をば三つのデイマンションを持つ立體として表現して、僕等を驚かしたのである。(中略) 竹久君はいつの間にか造物主の神秘を會得したのだ。<sup>11</sup>

森口の評論を読むと、どんたく人形は夢二の美意識を立体化して表現していることが窺われる。また、「竹久君はいつの間にか造物主の神秘を會得した」という評論のように、夢二が展覧会で人形という生き物の世界を観客に見せたことが考えられる。どんたく社同人が初めて発表した作品は、どうしてそれほど観客を魅了したのであろう。それは夢二が展覧会にあるあらゆるものを統合したからである。

夢二が多才な芸術家であることは、よく論じられている。高階秀爾は『日本近代の美意識』で、観客のために自分の芸術を統合する才能を持っている「アート・ディレクター」と

夢二を称している<sup>12</sup>。つまり、自分の芸術作品を用いて、ドラマチックな効果を演出するのは、夢二の一つの才能である。

「雑によする展覧会」でも、夢二がこの才能を発揮した。展覧会の出品目録のタイトルの横に、夢二は「まりをねっと・どらまにゆく第一階の試み」と書いている。「マリオネット」というのは「糸あやつり式の人形」のことで、人形劇で使っている人形のことを指す。夢二の作品は、実際に糸をつけていないが、まるで人形劇の一場面のような展示をすることによって、ドラマチックな雰囲気伝わってくる。森口多里は以下のように記述している。

作者のテーマは複雑である。「月」や「星」の如き作品にはシュルレアリスム的の幻影さへも取扱はれてゐる。作者は、この展覧会に「まりをねっと。どらまにゆく第一階の試み」と題したが、「月」や「星」は既に怪奇なドラマを私共の前に展開してゐる。<sup>13</sup>

人形の題名も、一つの物語を表現するには、重要な役割を果たしている。たとえば「国境へ」というテーマの作品は、互いに扶け合う老人夫婦の姿であるが、作品に納まらない過剰な感情は、夢二が巧みに「国境へ」というテーマを通して表現している。森口はその後、夢二を追憶する時、「(帝展に出品した人形が)竹久君の人形ほどに直接わたしどもの感情に飛び込んでくる作品はまだ現れない。それは古典的完成を無視するところに生れた人形の生命であった」<sup>14</sup>と夢二の人形を高く評価した。

夢二は観客を人形の世界に引き込むため、いくつかの仕掛けを作った。雑誌『若草』の記事によると、会場に来た観客は、即興的な絵と言葉を会場に添えることもでき、夢二も展示期間中に会場で自分のメッセージを掲示し、観客とやり取りをしたことが分かる。

どんたく社同人の岡山さだみの記述によると、会場では、以下のようなことも起きた。

(前略) (ギャラリーへ「アンナ」と云う人形をエンゲージした人のお使いが、届けられるのを待ちきれなくて受取りに見えた時) 誰かが「アンナがお嫁に行く」と云われたので、一輪の花を持たせて思わず泣いてしまつた。まだ会場を去りがたい来観者も、社の同人も思わず「アンナ」を取りまいて「さようなら」と云つて握手をして送り出した。<sup>15</sup>

これほど展覧会のすべてを統合し、観客と同人たちの心を引き締めたのは、夢二ならではの才能に違いない。観客たちは夢二が作った空間に囲まれると、自然に感傷的な気分になり、この情緒はまた会場にいるほかの観客に移ってしまう。創作者と観客との間、キャッチボールのようなやり取りが起こり、互いに影響を与えつつ、両方とも変化していく。観客の一人一人は、展覧会という大きな芸術作品の一役になり、脚本なしに会場で自由に演

じ、監督である夢二も役として観客と一緒に演じ、このドラマチックな芸術作品（展覧会）を完成させた。

## おわりに

どんたく社は旧来の人形製作方法に拘らず、古新聞紙で人形を作り、日常生活における布を自由に用いて人形の服装を作る。この手作り感溢れて、感情を表現している「どんたく人形」は、職人による様式美を重んじる人形や、ほかのアマチュア作家による愛玩用の人形とは異なっている。それは工芸とは異なる展開をしていく創作人形の萌芽と考えられる。

また、夢二とどんたく社同人が開いた「雛によする展覧会」は、観客をドラマチックな人形の世界に引き込み、人形・観客・創作者とともに、即興的に演じた一つの芸術作品とも言える。その人形の世界と、来場の観客たちが互いにぶつけ合い、両方とも変化しつつ、新しい世界を生み出している。それは「雛によする展覧会」が高い評価を受けた原因だと考える。

つまり、夢二とどんたく社同人の「どんたく人形」は、従来の人形工芸品とは異なり、ある「生き物」として、観客の感情を引き出す一つの芸術作品である。昭和初期、創作人形の熱が諸方に起こり、この気運を大いに助長させたのは、夢二とどんたく社同人による、その大きな芸術作品「雛によする展覧会」であると考えられる。

(京都大学)

---

### 主要参考文献（年代順）

竹久夢二「雛によする展覧会」案内状（1928）

どんたく社同人「雛によする展覧会」パンフレット（1928）

『主婦の友 12巻9号』（主婦の友社、1928）

『主婦の友 13巻3号』（主婦の友社、1929）

『主婦の友 14巻2号』（主婦の友社、1930）

森口多里「雛に寄する展覧会」（『若草』、1930.04）

岡山さだみ「竹久夢二先生とその人形の思い出」（『それいゆ 臨時増刊 人形の絵本』1952.04、ひまわり社）

堀柳女『人形に心あり』（1956、文芸春秋新社）

山田徳兵衛『日本の人形史』（角川書店、1961）

森口多里「美術史の中の夢二」（『本の手帖 特集・竹久夢二』、1962年07月号、昭森社）

『特集 竹久夢二 別冊太陽 日本のこころ 20』（1977.09.24、平凡社）

高階秀爾「世紀末の画家—竹久夢二」（『日本近代の美意識』、1978.03.20、青土社）

田中圭子「日本における球体関節人形の系譜」(『社会科学』80、2008)  
『生誕百二十五年記念 竹久夢二展』(2009、財団法人 NHK サービスセンター)  
『日本の人形—吉徳これくしょん名品集』(2011.02.04、十二世 山田徳兵衛)

## 註

- 1 田中圭子「日本における球体関節人形の系譜」(『社会科学』80、2008) p44 ~ 45。
- 2 堀柳女『人形に心あり』(1956、文芸春秋新社) p92 ~ 93。
- 3 竹久不二彦「手づくりのデザイン」『特集 竹久夢二 別冊太陽 日本のこころ 20』(1977.09.24、平凡社)、p186。
- 4 加藤暁子『日本の人形劇』(2007.12.20、法政大学出版局)、p75。
- 5 堀柳女前掲書、p95。
- 6 「どんたく人形の作り方」は竹久夢二伊香保記念館に所蔵している。また、それは昭和五年の竹久夢生展覧会に出品したもののか、と推測されている。
- 7 山田徳兵衛『日本の人形史』(角川書店、1961) p361。
- 8 『主婦の友 12巻9号』(主婦の友社、1928) p285 ~ 288。
- 9 『主婦の友 13巻3号』(主婦の友社、1929) p302 ~ 304。
- 10 『主婦の友 14巻2号』(主婦の友社、1930) p321 ~ 323。
- 11 森口多里「雛に寄する展覧会」『若草』(1930.04) p74。
- 12 高階秀爾「世紀末の画家—竹久夢二」(『日本近代の美意識』、1978.03.20、青土社) p496。
- 13 森口多里「雛に寄する展覧会」(『若草』1930.04) p74 ~ 75。
- 14 森口多里「美術史の中の夢二」(『本の手帖 特集・竹久夢二』、1962年07月号。三回分の「特集・竹久夢二」が1975年に一冊に編成。昭森社) p86 ~ 87。
- 15 岡山さだみ「竹久夢二先生とその人形の想い出」(『それいゆ 臨時増刊 人形の絵本』、1952.04、ひまわり社) p111 ~ 112。